東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　32：1～17，2006

「～として」再考

鈴木　智美

(2005．10．31 受)

【キーワード】　複合助詞、「～として」、存在・行動の規定、価値付け・意味付け、文修飾副詞相当句、中級日本語教育

1　複合助詞「～として」

本稿では、主として中級レベルの日本語教育の観点から、以下の例文の下線に示したような、名詞に後接する複合助詞「～として」、および「～として」を含む文を考察の対象とする。

(1) 私は留学生として日本に来た。
(2) 外国語を道具として使いこなす。
(3) 吉野の山は桜の名所として｛名高い／有名だ／知られている｝。
(4) 努力し続けることは人間として当然のことだ。
(5) このような失敗は、プロとして｛恥ずかしい／失格だ／許されない｝。
(6) 彼は仕事として雑誌に日本語の文章を書いている。
(7) 政府として、早急に対策を考えたい。

複合助詞「～として」は、名詞を修飾する場合は「～としてのN」の形をとる。また、述語のいわゆる連用中止法に準ずる「～とし」の形はない。文を述べる際の丁寧さの度合いにより、「～としまして」「～といたしまして」の形をとることも、用法により可能である。

2　先行研究の問題点および本稿の主張点

複合助詞に関わる先行研究は数多くあり、日本語教育の観点等からまとめられた文法解説書や辞書類を見ても、複合助詞「～として」についての記述のないものはないと言ってもよい。しかし、それらの先行研究の成果を検討すると、「～として」の分析記述については以下のような問題点が残されていることがわかる。

まず、「～として」の意味・用法をすべて網羅的に記述していると考えられるものがない。日本語教育の観点からまとめられた文法解説書等では、比較的基本的な用

法を中心に記述されることが多い。一方、個々の研究書や論文では、複合助詞全体を視野に入れた場合は、「～として」の意味・用法のみを詳細に検討するには至らず、「～として」に焦点を当てた場合は、逆に何らかの特定の問題について詳細に議論されることになる。

次に、通常「～として」という一形式に着目した分析がなされ、「～として」を用いた「文」の果たす役割は何かという観点からの考察が不十分である。具体的には、「～として」の前に立つ名詞が「資格、立場、名目」などを表すという分析はこれまで多くなされているが、「～として」を用いた文全体が何を述べようとするものなのかという観点を示したものは少ない[1]。

また、このような観点からの分析が不十分であるためか、本稿で指摘するような「～として」の文修飾副詞相当句の役割については言及されていない。

また、日本語教育の観点からは、種々の意味・用法を持つ「～として」を教授項目としてどのように扱うか、どの用法をどのような順序で提示するかという点にまで踏み込んだ考察がなされていない。

以上のような問題点を踏まえ、本稿では、複合助詞「～として」およびそれを含む文について再考察を行う。本稿における主な主張点は以下のものとなる。

(8) 複合助詞「～として」を用いた文の意味・用法は、6つのタイプにまとめられる。大きくまとめれば、「～として」文は、「ある一つの資格・立場・名目を設定して、あるものの存在・行動のあり方を規定したり、あるいはある一つの観点を導入して、物事に対し何らかの価値付け・意味付けを行ったりする」ものと考えられる。

(9) 「～として」には、文修飾副詞相当句の役割を果たす場合がある。

(10) 中級日本語教育においては、「～として」の基本的な用法を段階を踏んでおさえるとともに、目的に応じてそれ以外の用法も適宜扱うことが求められる。また、文修飾副詞相当句タイプには特に注意が必要である。

3　「～として」を含む文の6つのタイプ

「～として」を含む文には、以下の3.1節から3.6節に述べるように6つのタイ

[1] 友松他（1996:86-87）に「ものごとを判断する時の立場を言いたい時」、森田・松木（1989:3）に「何らかの意味や価値づけをする表現」、森田（1989:798）に、「(その）資格や立場にあるということに何らかの意味や価値づけをする表現意識」（(　) 内は引用者）という記述が見られる。

プのものがある。

3.1　存在・行動のあり方の規定：AはBとして…（V）（A＝B）

意味・機能：ある一つの資格・立場・名目「B」を設定して、「A」というものの存在・行動のあり方を規定する。「Aは、Bという資格・立場・名目で…する。」

第1節で挙げた例（1）がこれにあたる。（以下に例（11）として再掲）

（11）私は留学生として日本に来た。

（12）父は専門家として、環境問題について意見を述べた。

この時、「B」は「A」の資格・立場・名目を表す。したがって、AとBとの間には「A＝B」という関係が成り立つ。例（11）では「私＝留学生」である。「私」は「留学生」という資格・立場で日本に来た。ビジネスマンや教師という資格・立場で来たのではない。「私」の存在と、その“来日”という行動のあり方は、この「留学生」という資格・立場を設定することによって規定される。

例（12）では「父＝専門家」である。「父」は「専門家」という資格・立場で意見を述べた。一般市民の立場で述べたのではない。「父」という人間の存在・行動のあり方は、このような資格・立場から規定される。

（13）宮様は鳥類研究所に非常勤研究員として勤めてこられた。

（14）彼は駆け出しの新聞記者として日夜奮闘している。

（15）睡眠障害は、今新たな現代病として広がっている。

同様に、例（13）では「宮様＝非常勤研究員」である。宮様の鳥類研究所への勤務という存在・行動のあり方は、このような資格・立場・名目から規定される。例（14）では「彼＝駆け出しの新聞記者」である。「駆け出しの新聞記者」は「彼」の資格・立場を表す。日夜奮闘している彼の行動のあり方は、このような観点から規定される。例（15）では「睡眠障害＝新たな現代病」である。「睡眠障害」は、「新たな現代病」という名目でとらえられ、その広がりのようすが規定される。

この意味・用法においては、「AはBとしまして…（V）」という形はとりにくいと思われる。また、「…（V）」という述語部分には、主体Aの存在・行動のあり方を示す、以下のような動詞がくる。

述語にくる要素例：生まれる／生きる／暮らす／過ごす／振る舞う／存在する／発足する／現れる／機能する／成立する／通用する／参加する／列席する／来

る／行く／同行する／加わる／仕える／勤める／活躍する／仕事をする／言う／発言する／意見を述べる／就職する／勤務する／デビューする／出場する／蘇る／残る／取り残される／広がる／溶け込む／映る／誇りを持つ／負い目を背負う／がんばる

3.2　行為・行動・態度のあり方の規定：AはBをCとして…（V）（B＝C）

意味・機能：ある一つの資格・立場・役割・名目「C」を設定して、主体「A」の対象「B」に対する行為・行動・態度のあり方を規定し、意味付ける。「Aは、BをCというものと｛考えて／位置付けて｝、…する。」

第1節で挙げた例（2）がこれにあたる。（以下に例（16）として再掲）

（16）外国語を道具として使いこなす。

（17）ホームステイの家族は、私を家族の一人として温かく迎えてくれた。

3.1節のタイプと異なり、文中にはA、B、C、3つの要素が現れる。この時、「C」は「B」の資格・立場・役割・名目を表す。したがって、BとCとの間に「B＝C」という関係が成り立つ。例（16）では、「外国語＝道具」である。主体は対象である「外国語」をどのようにとらえて使用するか。その行為・行動のあり方は、「道具」という役割・名目を設定することによって規定される。鑑賞や研究の対象ではなく、主体は外国語を「道具」と位置付けて使用している。

例（17）では、「私＝家族の一人」である。ホームステイの家族の「私」に対する行動・態度のあり方は、このような資格・立場を設定することによって規定される。ホームステイの家族は「私」を「お客」と考えるのではなく、「家族の一人」と位置付けて接している。

（18）日本人は米を主食として食べている。

（19）父は、甥を通訳として海外に同行した。

（20）異国で過ごした日々を、大切な思い出として胸にしまっておく。

例（18）では「米＝主食」である。日本人の米に対する食行動は、このような役割・名目を設定することによって規定される。日本人は「米」を野菜や魚や肉と同じものと考えるのではなく、これを「主食」と位置付けて食べている。例（19）では、「甥＝通訳」である。父は甥を「通訳」という資格・立場・役割・名目で同行した。例（20）では「異国で過ごした日々＝大切な思い出」である。その記憶を胸にしまっておく「私」の行動・態度のあり方は、「大切な思い出」という名目を設定す

ることによって規定され、意味付けられる。

この意味・用法においても、「AはBをCとしまして…（V）」という形はとりにくいと思われる。また、「…（V）」という述語部分には、主体Aの対象Bに対する行為・行動・態度のあり方を示す、以下のような動詞がくる。

述語にくる要素例：とらえる／考える／感じる／受け止める／扱う／理解する／掌握する／区別する／見る／認める／眺める／解釈する／読み取る／選ぶ／数える／挙げる／掲げる／与える／取り上げる／結びつける／狙う／開発する／改良する／しまっておく／保存する／持って行く／持って来る／招く／遇する／受け取る／信頼する／利用する／守る／保護する／思い出す／尊重する／獲得する／自覚する／主張する／示す／伝える／話す／再現する／指示する／喜ぶ／恐れる／退ける／楽しむ／悟る／あきらめる／納得する／覚えている／記憶する／思い浮かべる

3.3　ある一つの側面からの価値付け・意味付け：AはBとして…（A＝B）

意味・機能：ある一つの観点「B」を導入して、「A」に対し何らかの価値付け・意味付けを行う。観点となるBは、主題Aが持ち得るある一つの側面である。「Aは、Bという側面から考えると…だ。」

第1節で挙げた例（3）がこれにあたる。（以下に部分的に例（21）として再掲）

（21）吉野の山は桜の名所として名高い。

（22）京都は歴史の古い町として有名だ。

（23）日本は火山と地震の多い国として知られている。

この時、「B」は主題「A」のある一つの“側面”を表す。したがって、AとBとの間には「A＝B（一側面）」という関係が成り立つ。例（21）では「吉野の山＝桜の名所」である。「吉野の山」には様々な側面があるが、その一つが「桜の名所」である。この観点を取り上げ、「吉野の山」に対し「名高い」という価値付け・意味付けを行っている。

例（22）では、「京都＝歴史の古い町」である。「京都」には様々な側面がある。風景の美しい町であり、先端文化の栄える都市でもある。「歴史の古い町」というのは、その一つの側面である。この観点から見ると、京都には「有名だ」という価値

付け・意味付けができる。別の観点から見れば、「京都は先端文化の栄える都市として、意外と知られていない」とすることができるかもしれない。

例（23）では、「日本＝火山と地震の多い国」である。日本には様々な側面がある。火山と地震が多いことがそのすべてではない。しかし、この側面から考えると、日本は「（皆によく）知られている」と判断・評価できる。「火山と地震の多い国」は、日本に対し何らかの価値付け・意味付けを行う際の一つの観点となる。

（24）タイは仏教の国として有名だ。

（25）あいさつは職場のマナーとして当然のことだ。

（26）「ふく屋」の豆菓子は気の利いた東京土産として喜ばれている。

（27）「さくら」は女の子の名前として人気がある。

例（24）では「タイ＝仏教の国」である。仏教の国であることはタイの一つの側面である。ここでは、その観点からタイという国に対し「有名だ」という価値付け・意味付けを行っている。例（25）では「あいさつ＝職場のマナー」である。これは「あいさつ」の一つの側面である。あいさつには親しみの気持ちを表す側面などもある。しかし、職場のマナーという面から考えると、「あいさつ」には「当然のことだ」という価値付け・意味付けができる。

例（26）では、「『ふく屋』の豆菓子＝気の利いた東京土産」である。その菓子には「珍しい」「おいしい」「多少値が張る」などの様々な側面があるかもしれない。しかし、「気の利いた東京土産」という側面からとらえれば、それは「喜ばれている」ものと判断・評価することができる。例（27）では、「『さくら』＝女の子の名前」である。「女の子の名前」という観点から、その名前に「人気がある」という価値付け・意味付けを行っている。

この意味・用法においては、「AはBとしまして…」という形をとることも可能である。「京都は歴史の古い町としまして、大変有名です」「吉野の山は桜の名所としまして、名高いところとなっております」など、述べ方の丁寧さの度合いが文全体において高くなれば、可能であると思われる。

ここでは、述語部分に、何らかの価値付け・意味付けを行ったり、判断・評価を述べる語がくる。品詞で見ると、「名高い／残念だ／有名だ」などの形容詞、「残念なことだ／恥ずべきことだ／当然のことだ／一流だ」などの（形容詞・形容詞相当表現＋）名詞、「知られている／人気がある」などの動詞表現が含まれる。

述語にくる要素例：有名だ／理想的だ／貴重だ／不可欠だ／当然だ／適当だ／残念だ／名高い／ちょうどいい／珍しい／珍しくない／ずっと変わらない／ふさわしい／物足りない／恥ずかしい／典型的な～だ／当然のことだ／残念なことだ／知られている／人気がある／好かれている／嫌われている／怖がられている／恐れられている／見慣れている／記憶に残っている

3.4　価値付け・意味付けの観点を導入する文修飾副詞相当句：AはBとして…（A≠B）

意味・機能：ある一つの観点「B」を導入して、「A」に対し何らかの価値付け・意味付けを行う。Bというもののあるべき姿、あるはずの姿に照らして、Aを評価する。「Aは、Bという観点から考えると、…だと言える。」
※「～として」は文修飾副詞相当句の役割を果たしている。

第1節で挙げた例（4）（5）がこれにあたる。（以下に例（28）（29）として再掲）

（28）努力し続けることは人間として当然のことだ。
→「人間であるならば…／人間であることを考えると…」
⇦「人間とは本来努力するものだ」という意識から

（29）このような失敗は、プロとして｛恥ずかしい／失格だ／許されない｝。
→「プロであるならば…／プロであることを考えると…」
⇦「プロなら、このような初歩的な失敗はしないものだ／してはならない」という意識から

ここで、「B」は「A」を評価する際に導入される一つの観点となっている。ただし、3.3 節で見たタイプとは異なり、AとBとの間に「A＝B」という関係は成り立たない。「A≠B」である。例（28）では、「努力し続けること＝人間」ではない。あえて結び付けるならば、「努力し続けること＝人間の｛行い／生き方｝」などと補う必要がある。ここでは、「努力し続けること」を「人間」の「本来あるべき姿、あるはずの姿」に照らして[2]、「当然のことだ」と判断・評価している。

[2] 森田（1982:126）は、このタイプの「～として」を「～にとって」と比較し、「『x として』は、x を『(何か) をするはずのもの』と見る立場から発せられて」いると指摘している（下線は引用者）。ただし、このタイプの「～として」が文修飾副詞相当句の働きをしているとの指摘はない。

例（29）でも「失敗＝プロ」ではない。あえて結び付けるならば、「失敗＝プロの｛振る舞い／すること｝」などとなる。そのような「失敗」を「プロ」の本来あるべき姿、あるはずの姿に照らして評価すると、「恥ずかしい／失格だ／許されない」と判断・評価される。「プロ」は、このような価値付け・意味付けを行う際の一つの観点となっている。

ここでは、「～として」が文全体に対する評価の観点を導入する“文修飾副詞相当句”の役割を果たしている。例（28）の「人間として」は、「人間であるならば…／人間であることを考えると…」と、文全体に対する評価の観点を導入する働きをする。例（29）の「プロとして」は、「プロであるならば…／プロであることを考えると…」というように、文全体に対する評価の観点を示す。

また、この時の判断・評価の背景には、話し手が評価の観点として導入される「B」を本来どのようなものととらえているか、そのとらえ方が価値付け・意味付けの基盤として働いていると考えられる。話し手は、話し手の考える「観点B」の“本来あるべき姿”に照らして、評価を行う。例（28）では、話し手は「人間とは本来努力するものだ」という考えを持っていると言える。話し手のこのような意識が、努力し続けることを人間として「当然のことだ」と判断・評価する背景にある。例（29）では、「プロなら、このような失敗はしないものだ／してはならない」という意識が評価の基盤として働いている。

よって、評価の観点として導入される「B」には、それが“本来どのようなものであるはずか”という規範的な性格付け・役割判断が可能な「人、親、母、プロ、女性、教師、チーム、男」などが立つ。「私、あなた、彼、彼女」などの人称代名詞、および無名の人物を指す固有名詞などは、それが表すものについての規範的な性格付けが行いにくく、用いられない[3]。

また、話し手のとらえ方によっては、同じ物事に対して異なる評価が下される。

（30）辞めて責任をとることは、企業のトップとして当然のことだ。

⇦「企業のトップなら辞任して責任をとるものだ」という意識

（31）辞めて責任をとることは、企業のトップとしてもはや時代遅れだ。

⇦「企業のトップなら辞任せずに責任を全うするものだ」という意識

例（30）では、「辞めて責任をとること」について、「当然のことだ」という評価がなされている。その背景にあるのは、「企業のトップなら辞任して責任をとるものだ」という話し手のとらえ方である。一方、例（31）では、同じことについて「時

[3] 人称代名詞や固有名詞を用いる場合には、「私としては」「太郎としては」のように「は」を付加した表現となる。

代遅れだ」という評価がなされている。この場合には、「今時の企業のトップなら辞任せずに責任を全うするものだ」という話し手の意識が背後に働いている。それぞれ、評価の観点となる「企業のトップ」について、話し手がそれを本来どのようなものと考えるかの違いが反映されている。

この意味・用法の場合、「～として」は文修飾副詞相当句という独立度の高い要素となっているため、「AはBとしまして…」という形をとることは可能である。「国際社会での著名人のそのような振る舞いにつきましては、同じ日本人としまして、まことに恥ずかしい限りです」「政府の少子化対策について考えますと、当該者の女性の一人としまして、十分であるとは到底思えません」など、やはり文全体において、述べ方の丁寧さの度合いは高くなる。

また、このタイプの文の述語部分には、3.3 節で見たタイプと同様、何らかの価値付け・意味付けを行ったり、判断・評価を述べたりする語がくる。

3.5 行為・行動の規定・意味付け：AはBとして…（V）（B＝［V］という行為）

意味・機能：ある一つの観点「B」を導入することによって、主体「A」の［V］という行為・行動を規定し、意味付ける。「Aは、Bという意味で、…する／Aが…すること、それは即ちBである。」

第1節で挙げた例（6）がこれにあたる。（以下に例（32）として再掲）

（32）彼は仕事として雑誌に日本語の文章を書いている。

ここでは、B＝［V］という関係が成り立つ[4]。例（32）では、「仕事＝雑誌に日本語の文章を書くこと」である。彼が「雑誌に日本語の文章を書く」という行為・行動は、この「仕事」という観点から規定し、意味付けられる。「彼は“仕事”という意味で雑誌に日本語の文章を書いている」「彼が雑誌に日本語の文章を書くこと、それは即ち仕事である」と言うことができる。

（33）会員は義務として会費を納めなければならない。

（34）隣国では、国の方針として情報技術の開発に力を入れている。

（35）我が社では、セキュリティ対策として、情報へのアクセス履歴を厳しく管理している。

例（33）では「義務＝会費を納めること」である。「会員が会費を納めること、そ

[4] このタイプの「～として」については、馬（1997:26）が指摘し、佐藤他（2001:81）でも例が挙げられている。

れは即ち義務である」と言える。例（34）では、「国の方針＝情報技術の開発に力を入れること」である。「情報技術の開発に力を入れる」ことは、「国の方針」という観点から規定し、意味付けられる。例（35）では、「セキュリティ対策＝アクセス履歴を管理すること」である。「我が社が情報へのアクセス履歴を厳しく管理すること、それは即ちセキュリティ対策である」という意味付けが行われる。

この意味・用法の場合も、「AはBとしまして…」という形をとることができる。「当社では、セキュリティ対策としまして、情報へのアクセス履歴を厳しく管理しております」「我が国では、科学技術推進の一環としまして、今後宇宙開発事業に力を入れることを決定いたしました」など、述べ方の丁寧さの度合いは、やはり文全体において高くなる。

ここでは、「…（V）」という述語部分には、主体「A」の行為・行動を示す動詞がくる。また、観点「B」には、「仕事、対策、方針、義務、補償」など、その内容をさらに詳しく述べることが可能な名詞が用いられる。

3.6　行為・行動の主体：Aとして…（V）

意味・機能：ある一つの資格・立場・名目「A」を示して、主体「A」の行為・行動を規定し、意味付ける。Aは、行為・行動の“主体”であると同時に、その主体の資格・立場・名目を表す。「Aは、Aという資格・立場・名目で…する。」

第1節に挙げた例（7）がこれにあたる。（以下に例（36）として再掲）

（36）政府として、早急に対策を考えたい。

ここでは、「政府」が「対策を考える」という行為・行動の“主体”であると同時に、その主体の「資格・立場・名目」を表している[5]。「政府」は「政府」という資

[5] 「われわれとして最も注目せねばならぬのは、」（永野（1953:111））の例は、特に言及されてはいないが、このタイプのものと考えられる。また、森田・松木（1989:4）は「県として対策を講じる必要がある」などの例を挙げ、これを「『が』で置き換え可能な主格助詞の役割を果たしている」ものと分析している。そこでは、そのような例は「比較的少なく」それほど厳密に区別する必要はないだろうとされているが、ニュース報道などを見ると「～として」のこのような用法にはしばしば遭遇するのではないかと思われる。また、馬（1997:26-29）には「判断主体化された立場」を表すものとして「私としては、ひとこと挨拶したい」「太郎としては、彼らを応援しているつもりなのだろう」などの例が挙げられている（下線は引用者）。しかし、この用法は従属節以外では常に「～としては」の形で現れるとしており、本稿で指摘したような「は」を伴わない形での「政府として／委員会として」などの用法には言及していない。

格・立場において、対策を考える。

(37) この問題に対し、日本政府としてどう結論を出すのか。

(38) 県としてぜひとも対策を講じなければならない。

(39) 委員会として、早急に委員長を選出する必要がある。

例 (37) では「日本政府」は「結論を出す」主体であると同時に、その主体の「資格・立場・名目」を表す。「日本政府は、日本政府として、どう結論を出すのか」と言い換えることができる。例 (38) では、「県」は「県」という資格・立場において「対策を講じる」。例 (39) も、「委員会」は「委員会」という資格・立場で「委員長を選出する」ことになる。

この意味・用法の場合には、「Aとしまして…」という形自体は不可能ではない。しかし、「日本政府としましては、早急に結論を出したいと思います」「日本大使館としましては、今後当局を通じて情報収集を行っていくことにしております」というように、通常「～としましては」の形をとると思われる。述べ方の丁寧さの度合いは、やはり文全体において高い。

ここでは、「… (V)」という述語部分には、主体「A」の行為・行動を示す動詞がくる。また、主体となる「A」には、行為・行動の主体であると同時に、その資格・立場・名目なども同時に表すことのできる「国、政府、大使館、県、委員会、協会」などの名詞が立つ。

4　その他の形式との比較

4.1　格助詞「で」との違い：「～で有名だ」と「～として有名だ」

「で」：有名であることの“原因・要因”を示す。 「～として」：有名であると判断する際の、ある一つの側面、とらえ方を示す。

これは、3.3 節で見たタイプの「～として」文である。ある一つの観点からの価値付け・意味付けを行うものだが、その観点とは、主題となるもののある一つの「側面」を表すものである。

(40)　タイのプーケット島はリゾート地として有名だ。(＝島の一“側面”)

(41) ＊タイのプーケット島は美しいビーチとして有名だ。(＝島の一“部分”)

例 (40) は、プーケット島をその「リゾート地」であるという一つの“側面”から見たものである。「～として」が示す評価の観点は、このように主体の一側面を表

す。「プーケット島＝リゾート地」という言い換えの関係が成り立つ。

しかし、例（41）は非文となる。プーケット島において「美しいビーチ」はその島の「一側面」ではない。島には山や森、谷や町もあり、島全体を「ビーチ」ととらえることはできない。「美しいビーチ」は、山や森などと同じく、その島を構成する一つの“部分”である。「プーケット島⊃美しいビーチ」という関係になる。この場合、以下の例（42）のように格助詞「で」を用いれば、問題はない。

（42）タイのプーケット島は、美しいビーチで有名だ。

格助詞「で」によって、プーケット島が有名であることの“原因・要因”が示されている。原因・要因には島の“一部分”が取りあげられてもかまわない。

4.2　格助詞「に」との違い：「～に使用する」と「～として使用する」

「に」：使用の目的・用途を示す。
「～として」：使用する際のある一つの役割を示す。

これは3.2節で見たタイプの「～として」文である。

（43）ハードディスクの空き容量を仮想メモリとして使用する。

（44）ハードディスクの空き容量を仮想メモリに使用する。

「ハードディスクの空き容量」は種々の可能性を持つが、その一つとして「仮想メモリ」として働く側面がある。例（43）はこの一つの役割に着目して「空き容量」をとらえ、それを使用する行為を規定している。「ハードディスクの空き容量」を「仮想メモリ」の機能を持つものと“みなして”いると言える。現時点でそのような「役割」を与えたのだという意味合いが感じられる。

これに対し、例（44）では格助詞「に」によって使用の目的・用途が示されている。現時点での「役割付与」という意味合いより、むしろ役割を交替した結果の“着点・到達点”を示す意味合いが感じられる。

4.3　「～として」と「～にとって」

「～として」：規範意識をもとに、文全体に対する評価の観点を導入する。
「～にとって」：あるものを、ある枠組みに引き寄せ、あてはめてみた場合に、それがどのような価値を持つかを述べる。

ここでは、3.4節で見た文修飾副詞相当句の「～として」文が問題となる。

(45)　a　そんな失敗はプロとして致命傷だ。

　　b　そんな失敗はプロにとって致命傷だ。

例（45）aでは、ある失敗をどう考えるかという判断をするにあたり、「プロ」という観点を導入している。話し手には「プロとは本来どうあるべきか」という規範意識がまずあり、それに照らして、その失敗に「致命傷だ」という価値付け・意味付けが行われている。「～として」は、話し手の意識に照らして、いわば能動的に文全体に対する評価の観点を導入する。評価の背後には、「プロならそんな失敗はしない」という話し手の意識が働いている。

一方、例（45）bでは、まず「失敗」がある。そして、「プロ」という枠組みを設定し、その失敗をそこにあてはめて考えると「どんな意味が浮かび上がってくるか」を考える。「プロ」という受け皿、または判断の枠組みにいわば受動的にあてはめてみると、それは「致命傷」であるということが浮かび上がってくる。ここでは、はじめから「プロとはこういうものだ」という規範意識があって評価を下しているわけではない。まず「失敗」があり、それを「プロ」という枠組みにあてはめ、引き寄せて考えるとどうだろうかという思考の流れがある。

プロ　として	⇨	＜考える＞	［その失敗］とは？
プロ　にとって	⇦	［その失敗］とは？	＜あてはめる＞

「～として」を用いた文は、このように何らかの規範意識に基づいて、ある事物についての価値判断を述べたり、提言あるいは教訓を述べたりする働きをする。一方「～にとって」を用いた文は、話題となるある事物について、表面的には見ることのできないその意味・価値を浮かび上がらせ、述べようとするものであると考えられる[6]。「～として」と「～にとって」のこのようなベクトルの違いは、以下のような文において異なる解釈として表れる。

(46)　a　そのような行動は、教師として問題だ。

　　b　そのような行動は、教師にとって問題だ。

例（46）aは、「教師という観点から見ると…／ほかでもない教師がそのような行

[6] 「～にとって」の働きについては、本学留学生日本語教育センター金子比呂子氏と、金子（1993）に基づき、有益な議論をさせていただいた。もちろん、本稿における記述内容については、全て執筆者が責を負うものである。

動をとったと考えると…」と、文全体に対する評価の観点を導入している。背後には「教師はそのような行動をとるものではない」という意識が働いている。この場合、その「行動」をとったのは「教師」であると考えられる。

一方、例（46）b は、問題となっている「行動」を教師という受け止め役にあてはめ、引き寄せて考えるとどうだろうかという思考の流れを表す。その「行動」をとったのは、教師以外の人であるという解釈になる。

5　中級レベルの日本語教育において

5.1　「～として」文の６つのタイプと中級日本語教育

本稿では、「～として」を含む文を検討し、3.1 節から 3.6 節に述べたような６つのタイプにそれをまとめた。中級日本語教育で通常導入されるのは、3.1 節の「私は留学生として日本に来た」、3.2 節の「日本人は米を主食として食べている」、3.3 節の「京都は歴史の古い町として有名だ」のタイプになるだろう。

3.5 節の「会員は義務として会費を納めなければならない」（「～」として＝［V］動詞句タイプ）、3.6 節の「政府として、対策を考えたい」（資格・立場と同時に主体であることを示すタイプ）の２つについては、応用事項として扱われるか、あるいは教授項目として特に触れられていない場合もあると考えられる。

また、3.4 節で見た「努力するのは人間として当然のことだ」という文修飾副詞相当句タイプは、その意味および構文上、特殊性を持つ用法となっている。

しかし、中級レベルの日本語教育において「～として」の種々の意味・用法をいかに扱うかを考えた場合、必ずしも、基本的でない意味・用法を教授項目から除外してもよいということにはならないだろう。多様化する日本語学習者がそれぞれの目的を達成するために必要な「日本語教育文法」（野田（2005）等）を整備するという観点から考えてみると、基本的用法以外の「～として」も、見逃すことのできない重要性を持っているのではないかと考えられる。

例えば、日本の高等教育機関での勉学・研究を目指し、高度な日本語能力の獲得を目指す学習者には、何らかの規範意識に基づき価値付け・意味付けを行う文修飾副詞相当句タイプの「～として」文や、ニュース報道などでよく見受けられる、主体を示す「～として」（および「～としましては」）の用法などは、「読む・聞く・書く・話す」といういずれのコミュニケーション活動を考えても、むしろ外すことのできない教授項目となるのではないだろうか。

5.2　文修飾副詞相当句タイプの特殊性

また、文修飾副詞相当句タイプの「～として」文については、注意すべき点が二つある。まず、述語部分に評価・判断を示す語が立つという点において、これは基本的用法の一つである「京都は歴史の古い町として有名だ」タイプと、一見したところ区別がつきにくい。「困っている人を助けることは、人の行いとして当然のことだ」であれば、「困っている人を助けること＝人の行い」という関係が成り立つ。よって、これは通常の判断・評価文タイプである。困っている人を助けることを、「人の行い」という側面から見て「大切だ」と意味付ける。

ところが、「困っている人を助けることは、人として当然のことだ」になると、文修飾副詞相当句の「～として」文になる。この場合の「人として」は「人であるならば…／人という観点から考えると…」というように、文全体に対する評価の観点を導入する働きをしている。「困っている人を助けること＝人」ではない。「AはBとして…」文において「A≠B」という関係になっている。

また、「そんな失敗はプロとして致命傷だ」「そんな失敗はプロにとって致命傷だ」に見られるように、「～として」文と「～にとって」文の違いが問題になるのも、このタイプの「～として」文である。基本的用法を扱う際には、このタイプの「～として」文が紛れ込まないよう注意が必要であるし、この文の述べようとする意図を明確にした上で、別途取り上げることが必要だろう。

5.3　基本的用法の２タイプ－動詞文タイプと判断・評価文タイプ

また、基本的用法の「～として」文も、動詞文タイプと判断・評価文タイプの二つに分けて考えることができる。この二つは形式的にはその述語部分に、意味的にはそれらの文が述べようとしていることに、それぞれ違いが見られる。

まず、一方の「～として」文は動詞文であり、主体が「どのように行動するか」を述べるものとなっている。例えば、「私は留学生として日本に来た」「彼は通訳として働いている」のように、主体である「私」や「彼」の存在・行動のあり方を、「～として」に示す資格・立場・名目の観点から述べる。あるいは、「日本人は米を主食として食べている」「父は彼を通訳として雇った」「人々は受賞を名誉として受け止めている」のように、主体である「日本人」「父」「人々」の、それぞれ対象である「米」「彼」「受賞」に対する行為・行動・態度のあり方を、「～として」に示す資格・立場・名目・役割の観点から述べるものである。

他方、判断・評価文タイプは、形式上は形容詞文、名詞文、動詞文のいずれも可

能である。ただし、その述語部分には、何らかの価値付け・意味付けを行ったり、判断・評価を述べたりする語がくる。例えば、「京都は歴史の古い町として有名だ」「吉野の山は桜の名所として名高い」「日本は島国として知られている」における「有名だ」「名高い」「知られている」、また「(子供が人様に迷惑をかけて) 私は親として恥ずかしい」「あいさつは職場のマナーとして当然のことだ」「彼は剣の名手として恐れられている」に見られる「恥ずかしい」「当然のことだ」「恐れられている」などのように、明らかに評価的な意味を表す語が述語に立つ。これらの文は、主題となっている物事に対し、そのある一つの「側面」を「〜として」に示し、その観点からの価値付け・意味付けを行うものである。

このタイプの「〜として」文が「価値付け・意味付け」を行うものだという点には、注意が必要である。「東京は日本の首都として有名だ」はよいが、「？東京は日本の首都として人口が多い」では、文として意味をなさない。「人口が多い」は、主題となる「東京」に対し、その評価を表す表現とはなっていない。「人口が多い」ことは東京に対する評価ではなく、東京という町に備わった“属性”を示すものである。

また、この価値付け・意味付けは主題となる物事に対し、あくまで“「〜として」によって導入された側面”から行われる。したがって、別の面から見ればその評価も変わり得る。例えば、東京は「日本の首都」という面から見れば「有名だ」と評価できるかもしれないが、「緑の多い町」という視点から見れば「意外と知られていない」と、その評価は動く可能性がある。この場合には対比の「は」を伴い、「東京は日本の首都としては有名だが、緑の多い町としては、意外と知られていない」のように、その異なる側面を取り上げ、別の評価を下すことができる。しかし、「人口が多い」などの“属性”では、とらえる側面によってそれが変わるということにはならない。

このように、判断・評価文タイプは述語部分に立つ要素に意味的な制限が必要であり、また、5.2 節で述べたように文修飾副詞相当句の働きをする「〜として」文と見かけ上の区別がつきにくいため、基本的用法の中でも注意が必要である。

6　今後の課題

本稿では、複合助詞「〜として」、および「〜として」を含む文について再考を行った。「〜として」に限らず、今後意味研究の発展・充実を考えると、個々の形式の意味と、その形式を用いた「文」もしくはそれ以上の単位の意味とを、相互に関連付

けてとらえていくことが重要になると思われる。

また、日本語教育の観点からは、文法的・意味的に基本と考えられる用法をそのまま基本的な教授項目とするだけでなく、教育の目的にかなった扱いを考え、シラバスの吟味・再構築を行っていくことが課題になるだろう。

引用文献

金子比呂子（1993）「『Aは　xにとって　B』に関する一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』19号　pp. 17-28

佐藤尚子・小高　愛・白鳥智美・宮川和子・遠藤真由美（2001）「社会科教科書における後置詞について」『千葉大留学生センター紀要』7　pp. 43-88

友松悦子・宮本　淳・和栗雅子（1996）『どんな時どう使う　日本語表現文型 500』アルク

永野　賢（1953）「表現文法の問題－複合辞の認定について－」『金田一博士古稀記念 言語・民俗論叢』三省堂　pp. 95-120

野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版　pp. 1-20

馬　小兵（1997）「複合助詞『として』の諸用法」『日本語と日本文学』第24号　筑波大学国語国文学会　pp. 左23-31

森田富美子（1982）「『～として』と『～にとって』」『紀要』第6号　国際学友会日本語学校　pp. 124-127

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』（NAFL 選書5）アルク

Reconsidering the Meaning and Usage of the Postpositional Expression "*to shite*"

SUZUKI, Tomomi

The purpose of this paper is to reconsider the meaning and usage of the postpositional expression "*to shite*" and the "N (noun) *to shite*..." construction, as in the following sentences.

(1) Watashi wa ryuugakusei *to shite* nihon ni kita.
(2) Nihonjin wa shushoku *to shite* kome wo tabete iru.
(3) Kyoto wa rekishi no furui machi *to shite* yuumei da.
(4) Doryoku suru koto wa ningen *to shite* touzen no koto da.
(5) Kare wa shigoto *to shite* zasshi ni nihongo no bunshou wo kaite iru.
(6) Seifu *to shite* taisaku wo kangaetai.

In this paper, I emphasize the following four points which result from the investigation.

(7) The "N *to shite*..." construction has six different types of meanings and usages, exemplified by (1) to (6) above.
(8) Two main functions of the "N to *shite*..." construction can be stated. One is to define something or someone's existence or behavior by setting a position or qualification of it. The other is to specify the meaning or significance of something by setting some point of view.
(9) As for the "N to *shite*..." type of construction in (4) above, the postpositional phrase "N to *shite*" functions as the sentence modifier, establishing the point of view from which the meaning or significance of the subject is assessed.
(10) From the viewpoint of Japanese language education, the six different types of meanings and usages of the "N to *shite*..." construction must be addressed adequately in accordance with the learner's level and objective of study.